

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 242 回 新・熊谷市の現状とこれから

2008.2.24

今回は大変恐縮だが、わが街「熊谷市」の話である。熊谷市は一昨年、昨年と合併を繰り返し、人口 20 万人を超え、面積は旧熊谷市の約 2 倍 160 ㎥となった。かなり広域都市に変貌したが、日本は広し、全国には上手がいるものである。例えば花巻市。合併後人口は約 10 万人、面積は何と 900 ㎥となった。広すぎるため「地域分権化」せざるをえないということで、一体、合併は何の為だったのか、けつたいな話である。

特質すべきは新熊谷市の山林面積。江南町と合併するまでは約 120ha、江南町だけで 400ha 加わり、全国的にも山林面積が広い都市に生まれ変わった。緑が豊かでいい環境と言うべきか、将来の開発余地が豊富と言うべきか、陽転思考で前向きに評価しよう。

昨年末『熊谷市総合振興計画基本構想』が出来た。荒川と利根川に挟まった肥沃で緑豊かな地域であるゆえ、「川と川、環境共生都市・熊谷」をキャッチフレーズとしたマスタープランである。例によってありきたりの、お役所仕事と言う感じは否めない。が、その中で唯一評価できるのは、土地利用について、全体的な産業バランスを考慮して見直す必然を述べている点である。更に「目指そう値」と称して、目標を数値化し明記している点、大いに期待できるところである。

平成 20 年度予算は、一般で約 564 億円、特別と水道事業を合計して約 963 億円である。前年度比約 58 億円の減額予算だが、これは一部福祉関係支出が県に移転されるとのことで、事業性予算としてはむしろ増額されている。

例の「道路特定財源」だが、熊谷市の場合昨年度は約 18 億 5 千万円だった。これが、民主党がいう通り本則に戻ると、約 8 億 9 千万円減額される計算になる。本件に関しては、民主党のいう通りになると、「地方」は微妙なニュアンスがあるのも事実である。

「熱い（暑い）ぞ！熊谷」で全国的に有名になった昨年だが、イヤイヤ、単に喜んでばかりではいけない。暑さ対策として小・中学校区ごとに暑さ状況をリアルタイムで観測、「これ以上運動は控えるよう！」等の情報を、携帯電話に流す。そのため日本気象協会と日本体育協会の判断を仰ぐシステムを稼働させる。これは我国で初めてのことらしい。

熊谷駅周辺に「ドライミスト」を設置する。「ドライミスト」は、微細な水の粒で人工的な霧を発生させて、水が液体から気体になる際に周囲から熱を奪う気化熱を利用して周辺の気温を下げるシステム。愛知万博などでの実績から、噴霧エリアの気温をおおよそで 2～3℃低下させる効果が期待できるというものである。これはマズマズの施策といえよう。日本で一番暑い街から、「暑さ対策」をしっかりとやっている街に生まれ変わる。

新・熊谷市、当然、地方自治法による「特例市」を申請する準備をしている。特例市は平成 20 年 4 月 1 日現在で 43 市、県内では川口、所沢、越谷、草加、春日部（平成 20 年 4 月 1 日予定）に続き 6 番目となる。（さいたま市は政令指定都市、川越市は中核市に認定）

安心と安全な我「ふるさとづくり」は、今、始まろうとしている。

（以上、富岡清・熊谷市長からのヒヤリングによる）